

学校点描

7日間連続登校日は、さすがに生徒も教師もぐったり気味です。

《M中学校》

NO.12 H29. 2.5

担当：教頭

新入生オリエンテーションを1月31日に行いました。

町内の各小学校の6年生と保護者の方が、中学校に来て説明を受けます。最初に、授業中の1年生と2年生の様子を参観するとともに、校舎見学をしてもらいます。「あ～懐かしい!」「変わんねな～」なんて言うつぶやきが保護者の中から聞こえます。きっと本校卒業生の方なのでしょう。「教室に入らんねながな」と、残念そうに2年生の授業の様子を廊下から眺めながらつぶやいている声も聞こえます。

その後、再度、多目的室に集ってもらい、私の方から中学校の説明をしました。その最初に、6年生の児童2人に、校舎見学を試みての感想を言ってもらいました。一人の児童は「あまり小学校と変わらないかも」と話してくれました。もう一人の生徒は「自分の小学校よりすごく広かったです。」と話してくれました。それぞれの育った小学校の規模によって感じ方が違うようです。

「一人一人感想が違いますね。それでいいんです。一人一人考えたことや感じたことが違うことが大切です。自分とは違う考えの人がいて楽しいんです。自分と違う考えの人を大切する力を養う、それが中学生になることです。」と、付け加えておきました。

全国中学校スキー大会に関する新聞記事では、連日、M中関係の記事が掲載されました。スキー部の選手の記事はもちろん、美術の授業で記念品として彩色したコースターの記事も載っています。

記事の中に、会場で応援していた2年のY・Rさんのコメントがあります。「大会が終わっても選手が最上町のことを思い出してくれるといいな」と語ったという記事でした。

応援とお弁当

2月3日から始まった全中スキー大会は、町をあげての一大行事となりました。

「徹夜で、交代しながらコースを圧雪している係の人がいるんだよ」と、校長先生が教えてくれました。



本校では、全国大会に出場している選手の応援に、1年生と2年生が2日間大会会場に行く教育課程を組みました。特に、2月3日の大会初日は、冷たい吹雪の中での3時間近い応援となりました。それでも、生徒たちは声を張り上げて応援をしてくれました。そんな中学生の姿を観ていた会場の一般の方々や、役員の方々は大変感心していたそうです。仲間のために声を張り上げて応援してくれる本校の生徒に誇りをもちます。

そして、応援する力とは何だろうと考えます。

昔、M中に何回目かの赴任をしたとき。校歌や応援の声は一切でませんでした。生徒会担当だったわたしは、当時の応援団長を呼んで、「応援とは、自分に余裕がないとできないんだ。人を応援するのであれば、自分が自分に何倍も応援できる人間でないとイケないんだ。それでようやく、余裕がでるんだ」と語ったことがありました。

人を応援する。難しいことです。

芸能人では、それが芸になっているタレントもいます。元スポーツ選手もいます。人が人を応

援する、その姿を人は観て爽快になることもあるようです。

応援をし終わって学校に帰ってきた生徒たちは、だれも不平を言う人がいません。爽やかな笑顔もあります。実はそのことにわたしは誇り以上の真の感動を覚えるのです。

そう考えると、応援するということは、心がプラスの状態になるのかもしれませんが、だから、人は深夜でも起きてオリンピックで自国の選手を応援するのもかもしれませんね。

大会期間中、1年生、2年生は3日間、3年生は2日間のお弁当をお願いしました。土曜日、日曜日でせつかくの休日にも関わらず、ご家庭には大変ご迷惑をおかけしました。

実は、わたしも、4年間毎日休まずにお弁当を作っていました。息子の高校3年間、娘の高校3年間、そして部活の土日です。息子は1日2個弁当を用意してほしいと言ってきたので、多いときは、息子の2個と娘の1個と、当時教育委員会にいた自分の分1個で、合計4個でした。(教育委員会は、基本的に昼休みも外に出ないで誰かひとり是对応するというルールでしたので、私が担当していました。)

毎朝、4時30分に起きて作ります。最初は冷凍食品(冷食)をできるだけ使わないように、手作りだと思っていましたが、無理でしたね。今は、わが子の大好物の冷食は、すぐにわかります。時々、家庭科の教科書をみながら作ったりもしました。

お弁当をつくる。大変なことです。

学校給食は、法律でどこの学校でもできる限り実施するように決められています。なぜかという、健康の保持増進、望ましい食習慣、生命の尊重、社交性の醸成と勤労、食文化の理解等が目的です。

幸い、まずかろうと、例え茶色の色ばっかりの弁当になろうと、息子や娘は、弁当を空っぽにして帰ってきてくれました。またそれが励みでした。

給食は便利ですが、弁当でしか味わえない、何かを感じてくれる力が弁当にはあるようです。なんだか“応援”に似ているなあと思います。

応援したから、選手の技術的なものが急に伸びるなんてことはないかもしれません。

でも、応援は選手の心を+にして、応援をする人の心を+にしてくれる。

部活動終了後、バスの見送りに立っていると、

「教頭先生、H君とか、スキー部の結果はどうでしたか？」と、2年生の応援団長のA・Sさんが寄ってきました。

「ちょっと残念だったかな。でも、一生懸命に攻めての結果だからなあ」と、出場した全員の男子大回転の結果を伝えます。

「でも、今年全国を経験した選手は、来年きっと期待できますね」と、応援団長のA・Sさんが、そう言って、歩いて下校していきました。

選手の結果を+に変えた応援団長の後ろ姿に、「応援ありがとうね。みんな感動していたよ」と、わたしが投げた言葉は、あまりにも軽すぎて、わが身が情けなく感じました。

----- きりとりせん -----

ご意見・ご感想をお願いします。